

スペインにおける「読書へのアニマシオン」の源流と拡大状況

足立 幸子

教育学部 国語教育講座

(平成15年10月1日受理)

要 旨

「読書へのアニマシオン」は、スペインの読書指導方法で、1980年代初めにスペインのジャーナリスト、モンセラット・サルトによって開発された。1997年に翻訳書が出版されて以来、我が国の国語教育においても、教室の実践あるいは国語の授業としての実践が増えてきている。しかし、この本質は十分に解明されておらず、実践上の問題点や解決策も十分に検討されているとはいえない。そこで、本稿では、スペインにおいて、アニマシオンにかかわっている研究者、教師、ジャーナリスト、俳優、司書、出版関係者、書店関係者への複数回にわたるインタビューを通して、アニマシオンのスペインにおける歴史を描き出すことで、その特徴と問題点を明らかにした。

アニマシオンの発生は、20世紀初めの図書館員のストーリーテリングにさかのぼることができる。市民戦争後の図書館の大衆化にともなって、複数の図書館員が、子供の読書を促進するための手法としてストーリーテリングを用いるようになった。また、ストーリーテリングはスペインでは伝統的に、俳優のパフォーマンスの一種として認められている。しかし、このようなパフォーマンスだけで全ての子供を読書に接近させることは難しいとサルトラは考え、1980年代に多くの作戦と呼ばれる手法からなる、アニマシオンの方法を開発した。1990年代になって行われたサルトのセミナーでは、数多くの教師や親やその他子供の読書に関心がある者が、このアニマシオンの方法を学んだ。そして、彼らはそれぞれの立場に応じて、アニマシオンの方法を拡大していった。

これらの歴史の概観を通して明らかになったことは、次の2つの問題点である。1) アニマシオンにはストーリーテリングのようなパフォーマンス要素があることと、2) アニマシオンが学校の教科カリキュラムとして、位置づけられていないということ、である。これらの問題を解決するためには、教師がどのようにパフォーマンス能力を高めるか、また、カリキュラムにどのように位置づけるかということを考える必要がある。

1 はじめに

「読書へのアニマシオン」(La Animación a la Lectura, 以下、アニマシオン)は、スペイ

ンの読書指導方法で、1980年代初めにスペインのジャーナリスト、モンセラット・サルト（Montserrat Sarto）によって開発された。これは、「作戦」と呼ばれる活動から成り立っている。「作戦」の前に子供たちは本を紹介され1冊ずつ手渡され、それを各自のペースで読んでくる。「作戦」においては、作戦の実行者であるアニマドール（作戦を統括する人）の作ってきた質問に答えたり話し合ったりすることを通して、より深く読むことを学ぶ、というものである。質問は子供一人一人に用意されており、話し合いの時には、他者との協力によって自分の学習を深めるという集団学習の方法も取り入れられている。1997年に翻訳書が出版されて以来、我が国の国語教育においても、教室の実践あるいは国語の授業としての実践が増えてきている。しかし、本を人数分そろえることや、参加したい子供だけが参加するなど、現実の読書指導の場面にそぐわないと感じている教師も多い。そもそも、アニマシオンの読書指導論としての特徴や本質は十分に解明されておらず、実践上の問題点や解決策も十分に検討されているとはいえない。

このような研究の遅れについて、その理由は、スペインという国が、我が国の教育界、特に国語教育界に紹介されてこなかったということと、足立（2002）で指摘したように、アニマシオンという読書指導方法を開発したサルトラの活動の中心が、自分たちの行うセミナーにあり、理論や背景的知識を出版物という形で残していない点にある。

そこで筆者は、まずはアニマシオンについての情報を集めることを目標に、2002年12月より2003年4月までの5ヶ月間、日本学術振興会二国間交流事業スペイン派遣研究者として派遣された機会を利用し、スペインにおいて、アニマシオンにかかわっている研究者、教師、ジャーナリスト、俳優、司書、出版関係者、書店関係者へのインタビューを行った。たいていのインタビュアーには、複数回インタビューを行い、収集した情報を統合し修正する活動を通して、アニマシオンの歴史的全体像と現在における活動の拡大状況を把握することに成功した。本稿では、これらのインタビューの他に、児童書関係雑誌や図書館雑誌、各種出版物で確認しながら、アニマシオンの源流と発展及びその拡大状況を描き出し、そこから、スペインの読書指導方法としての特徴を明らかにすることを通して、我が国の国語教育における問題点を明らかにすることを目的とする。

2 アニマシオンの源流

(1) サラ・ブライアントのストーリーテリング

アニマシオンの源流は、20世紀初めの図書館員のストーリーテリングにさかのぼることができる。アメリカの図書館員、サラ・ブライアント（Sara C. Bryant）は、図書館員が子供にお話をする仕方を詳しく説明した著作『子供たちにお話をする仕方』原題：How to tell stories to children, 1905年, Houghton）を發表した。彼女の立場は、子供と本を結びつけるために、図書館に来た子供にお話をして聞かせるのは、図書館員の一つの技であるというものであった。この著書がスペイン語版で「お話を話す技」(スペイン語題：El arte de contar cuentos)として出版される。このスペイン語版は、筆者が確認した範囲では、1924年に翻訳されているが、その後も現在まで出版され続け、スペインの読書界に大きな影響を与え続けている。

(2) ストーリーテリングの民間伝承による展開と図書館の整備

このような、お話を話すということを受け継いだのは、エレナ・フォルトゥン(Elena Fortún)であった。彼女は1930年代以降活動を始めたが、音声による語り(narración oral)を実践した。さらに、民間伝承に基づいて、子供用の物語をつくり、児童文学の発生に影響を与えた。特に、7歳の女の子「セリア」が、上流階級でありながら活発な様子が新しい時代を予感させたシリーズは、第2期共和制時代をはさんで、大好評となった。また、市民戦争の後、図書館開発が進み、政府・公共機関による読書推進活動も活発になっていく。

(3)ストーリーテリングの確立と学校制度の改革

1960年代に入って、モンセラット・デル・アモ(Montserrat del Amo)は、『お話の時間』(原題: *La hora del cuentos*)を出版、1970年代のメルセデス・ゴメス・デル・マンサーノ(Mercedes Gómez del Manzano)、1970年代から80年代にかけてのテレサ・ドゥラン(Teresa Dúran)が、スペインにおいてストーリーテリング(Cuenta Cuentos)を確立した。このころ、大衆的な意味での児童文学が発生、教育改革運動があり、アニメーション成立のための基盤が確立した。

(4)サルトラのアニメーション「作戦」開発

1974年のカトリック系の国際会議で、初めてモンセラット・サルトラが「アニメーション」の手法を模索し始める。なぜなら、サルトラは「ストーリーテリングを聞いて、その本に興味を持ち、本の面白さに目覚め、読書をするようになる子供も確かに存在する。しかし、それだけでは、大多数の子供たちには、不十分である。もっと積極的に読書をし、しかも深く読めるようになるためには、アニメーションのような方法が開発されなければならない」と考えたからである。1970年代の終わりごろから、彼女とその仲間たちは、マドリッドのタレントゥム書店の2階に集まり、方法を議論し、実際に図書館や書店で試してみ、その方法を修正するというような活動を初め、1984年に25の手法(estrategia)を集めた『読書のアニメーション；子供を読者にするには』(原題: *La animación a la lectura: Para hacer al niño lector*、邦題: 読書で遊ぼうアニメーション 本が大好きになる25のゲーム)が出版された。これが1997年に翻訳され、我が国におけるアニメーションの紹介となる。1980年代には、児童文学ブームが起こり、アニメーションの拡大に拍車をかけるようになる。この結果、公共図書館・市立図書館、学校、家庭の3箇所でアニメーションが行われるようになる。その後の展開については、さらに詳しく検討する。

以上のことからわかることは、アニメーションは、学校で読書を教えるための方法として生まれたのではなく、図書館員が図書館に来た子供たちに対して行う技術としての「お話の時間」の延長として、生まれたことである。現在でも、スペインでは、図書館だけでなく書店やデパートの書籍売り場などで、ストーリーテリングを見ることができる。読書を教えるというよりも、聞き手を話に引き込んでいくための話術としての要素が非常に強い。事実、このような、ストーリーテリングをする人たちは、俳優としての勉強をしており、俳優のパフォーマンスとしてストーリーテリングに取り組んでいる。アニメーションを子供たちに行う際には、そのようなパフォーマンス・スキルを十分に高めなければならないし、そのつもりでアニメーションを行う必要がある。

3 スペインにおけるアニマシオンの拡大

1980年代以降、サルトラは、教師や司書などに対してセミナーを行うようになる。また、大学関係者も、教師対象のアニマシオンセミナーを行うようになっていく。セミナーを受けた人たちは、自分たちの立場に応じて、アニマシオンを解釈し、活動を広げていった。

(1)活動の主体と活動の概略

以下に示す9つの団体及び場面は、それぞれの立場でアニマシオンの活動を行っている。スペイン滞在時に筆者がインタビューや取材を通じて確認した範囲で、それぞれの活動の概略を示す。

エステル文化協会 (Asociación Cultural ESTEL (Estudio, Educación y Lectura))

これまでに日本で紹介されてきた「読書へのアニマシオン」は、エステルの活動のみである。エステルは、サルトラを顧問とし、20人弱のスタッフからなる民間団体で、子供たちへの実践を繰り返しながら、75もの「作戦」と呼ばれる指導手法を開発した(1998年当時)。

1980年代後半から、エステルの前身であるグループ(グループ名は何度も変更されている。その変更の過程は、足立(2002)に述べた)は、教師・司書・親・その他一般の人に向けてのアニマドル養成セミナーを行っている。アニマドルとは、アニマシオンを統括する人のことで、子供の読書についての深い理解、児童図書に対する幅広い知識、子供の読書を引き出していく指導技術、穏やかで辛抱強い人柄などが要求される。1990年代には中南米各国にも、2000年には日本においても、出張セミナーを行った。スペイン教育科学省が金銭負担をする教師研修のプログラムの1つに認められたこともあり、今では1万人近いセミナー修了者がいる。現在は、サルトラの体調不良もあって、セミナーの数は抑えられてきているが、メンバーは、児童図書批評等の活動で活躍している。特に、ドイツ、イタリア、ベルギーとともに「わたしはヨーロッパに住んでいる」という名の、児童図書選択批評プロジェクトに参加している。

オテロ・ガルシア (Otero García, M. J.)

1996年に『読書を楽しんで遊ぼう』(原題: *Jugamos a animar a leer*. CCS 出版) を発表した。この本の中でガルシアは、新しい作戦を数多く開発している。

グアダラハラの子書グループ

サルトラのセミナーを受講後、アニマシオンの活動を、公共図書館レベルで行っている。図書館に来た子供をたのしませる活動としてアニマシオンを解釈し、継続して活動してきている(2002年に活動継続25年を記念したイベントを行った)。教師グループとも交流を数多く行っているが、活動を記録として残していない。

ヘルマン・サンチェス・ルイペレス財団 (Fundación Germán Sanchez Ruipérez.)

スペインを代表する、児童図書関係の財団である。大学都市サラマンカに、国際児童図

書館、マドリッドに成人対象の分館を持つ。サラマンカの図書館は、児童文学や読書指導を研究するための情報を集めた国際資料部局と、地元の子供たちに対しての公共図書館的機能の二つを持っている。

公共図書館機能のほうでは、単なる図書館開放や図書の貸し出しだけでなく、2週間に1度、自由参加型のアニメーションを行っている。そのアニメーションを推進しているアニメーターは、もちろん、エステルセミナーを受けた司書である。

国際資料部局では、スペイン、中南米などのスペイン語圏だけでなく、英語圏などの資料も数多く収集、ヨーロッパを代表する国際図書館となっている。情報検索も優れていて、数多くの資料が電子化されている。

教師・司書・研究者を対象にセミナーも開講、2002年度は、7種類あったうちの1つが「読書へのアニメーションの経験」と題された、一泊二日のセミナーであった。先述のグアダハララの例や、サラマンカ市内でのアニメーション活動も、このセミナーで講義されていた。

このセミナーの他に、筆者のような外国人来訪者には、担当司書が案内としてつき、この財団の活動全体についても詳しく紹介するサービスを持っている。

そのほか、数多くのシンポジウムを企画している。読書史、図書館史、児童図書などに関する研究書も出版している。スペインにいわゆる国内の読書学会は存在しないが、それに替わる機能を果たしており、スペインの読書指導の一大センターとなっており、スペイン中に広がったアニメーションを様々な側面から支援している。

カスティージャ・ラマンチャ大学 (la Universidad de Castilla-La Mancha)

この大学には教育学部があり、キャンパス内に児童図書研究専門図書館を持っている。スペインでは、教師に研修の義務があるが、その研修を児童図書専門家のP・セリージョ教授 (P.C. Cerrillo) らが担当している。その研修セミナーの中では、マドリッド・コンプルテンセ大学のガルシア・パドリノ教授 (Jaime García Padrino) や、教師グループ、司書グループなどを講師として招き、アニメーションの拡大に寄与している。特に、アニメーションの手法だけではなく、児童文学の機能や読書教育の観点から、教師の研修の充実を図っている。

エキボ・ペオンサ (Equipo Peonza 教師グループ7名)

エキボ・ペオンサ (駒チームの意) は、雑誌『ペオンサ』を軸として、児童図書や読書指導の研究をしている小・中学校の教師7名のグループである。サルトのセミナー受講後、教育現場に即したアニメーションを開発した、それを作戦集として出版した。教師が、サルトらの考えをどのように解釈し、どのように結びつけていったかを探る上で、重要な事例となるので、後に詳しく検討する。しかも、このグループは、雑誌『ペオンサ』以外にも数多くの出版物を出しているため、アニメーションの拡大過程を知ることができる。

ラ・マール・デ・レトラス (La mar de letras 児童図書専門店)

ラ・マール・デ・レトラス (文字の海の意) は、マドリッドの旧市街中心地にある児童図書専門店である。毎週土曜日に3歳から5歳、6歳から8歳の子供を対象としたアニメ

シオンを行っている。アニマドールは書店員ではなく、俳優の訓練を受けた専門家である。

筆者は日本学術振興会特定国派遣研究員としてスペイン滞在中、ほぼ毎週この書店に通ってアニマシオンを観察した。3歳から5歳の子供は平均7～8人、6歳から8歳の方は平均3人であった。親が子供をつれてきて、アニマシオンをしている間、席をはずす。アニマシオンが終わる頃（約1時間後）に、また迎えに来るという形である。天気の良い日などは、あまり人数が集まらない場合もあった。

そのアニマシオンは、サルトラのようにはっきりとした「作戦」があるわけではない。毎週通って観察したところ、3歳から5歳では、ほぼ次のような手順で活動が進んでいく。A)子供たちが集まってきてあいさつをする。B)書店から自分たちの好きな本を選ぶ。それぞれ遊びながらめくったり絵をみたりしている。C)皆で集まって、えらんできた本を積み上げる。積み上げたら魔法をかけると称して、アニマドールの意図した本を取り出す。D)その本を読み上げながら、身体表現をしながら、読み通す。E)その本に基づいた身体表現を遊んだり、関係する絵を描いたりする。D)やE)については、2～3冊が取り上げられる。E)をしている間に親が迎えにくる。6歳から8歳のコースでは、話を人形劇として表現したり、自分たちで物語を作ったりすることが多かった。アニマドールは、子供たちの様子を見ながら、子供たちのしたいことを聞き、それによって予定を変更しながら、とにかく、本に関連する子供の活動（子供にとってみればそれは遊びと同義である）が様々な側面で行えるようにしていた。

アニマシオンを俳優が行っているということについてふれておきたい。スペインのアニマシオンは、先に論じたようにストーリーテリング（cuenta cuentos）がその源流としてあり、ストーリーテリングは、声で演じるという意味を持っている。また、人形劇・劇・詩の朗読は、児童文学の一部として取り上げられることが多い。このような背景から、表現するということと読書をするということが、日本以上に深く結びついているといえる。子供自身も、自分の体で、人形劇で、声で表現するというのを、アニマシオン活動として自然に受け止めていた。筆者は、これまでサルトのアニマシオンセミナーを4回受けてきたが、このような表現活動をアニマシオンとして取り上げているものは、見たことがなかった。したがって、サルトやエステルを中心として日本に紹介されたアニマシオンには、「表現」という視点が欠けていたといえよう。しかし、スペインの実情は、表現はアニマシオンの中心部分のように見受けられる。そもそも、アニマシオンがストーリーテリングから発生していることを考えると、表現というものを読書にかかわらせてどのように扱うか、我が国には存在しない視点を提供しているといえよう。

カサ・デ・アメリカ（Casa de América）

カサ・デ・アメリカは、社会教育施設の1つで、様々な映画やシンポジウムなどを文化活動として行っている。ここで、青少年の読書担当のビエンベニーダ・サンチェス・アルバ（Bienvenida Sánchez Alba）は、12歳、16歳の青少年向けのアニマシオンを行っている。

からの団体と違って、彼女は、サルトのこともエステルさえも知らなかった。インタビューで質問するために、サルトの書いた作戦集を筆者が持っていくと、それを購入するつもりなのか、書名等をメモしていた。

このアニマシオンは、事前に本を読ませてくるものではない。なぜなら、「事前に読ま

せると義務になってしまう」からだという。1日1回で終わる単発の活動で、この本は面白そうだなと子供が思ってくればよいという。エステルがやっている事前に読んでくる方式とはまったく異なる。これは、カサ・デ・アメリカという場の特殊性によるものであろう。一方で、このように、サルトラが「読書へのアニメーション」の活動を始め、それをセミナーという形で広げていったことは確かであるが、現在では、それを知らない人さえも、アニメーションを行っているというのが現状である。

(2)アニメーション活動団体の2つの傾向

ヘルマン・サンチェス・ルイペレス財団国際児童図書館部のルイス・ミゲル・センセラード（Luis Miguel Censerado）によると、大きく分けて二つの傾向があるという。

一つは、技術的手法的活動を中心に行っているグループで、上記の と がそれにあたる。主に、アニメーションの手法を「作戦」という形式でまとめあげ、それを一つの方法論として高めていった。この形式化が、アニメーションという手法の利用のしやすさを生み出した。足立（2002）で述べたように、サルトラが作戦を開発していく際には、学習心理学や読書の理論を取り入れいったにもかかわらず、その理論をサルトは一般に公開しなかった。したがって、彼女らの作戦集だけが、アニメーションの方法として一人歩きをした。このことがアニメーションの多様性を生み出すことになる。

もう一つは、アニメーションをさらにグローバルな概念としてとらえたグループである。すなわち、アニメーションの動詞形であるアニマル（animar、辞書上では、元気づける、活気づけるの意）を、「読書に目覚めさせること」「本を通してのコミュニケーションを促進すること」「本についての情報を知らせること」「本が好きだという気持ちを引き出すこと」であるととらえた。すなわち、読書を促進させること全般である。上記の から は、この考え方に基づいてアニメーションをおこなっている。先ほどアニメーションの多様性と述べたが、実に多様なアニメーションが存在することは、 から の違いを見れば明らかである。以下では、 のエキボ・ペオンサの事例を見ることにより、サルトの考えや手法が、一般の教師にどのように受け入れられていったかを検討する。

4 現状の具体例とサルトラへの批判

(1)エキボ・ペオンサの活動

まず、前節の で取り上げた、エキボ・ペオンサの事例を詳しく取り上げる。エキボ・ペオンサ（駒チームの意）の構成員は、スペイン北部のサンタンデル近郊に住む公立・私立の小学校・中学校教員である。彼らは、アニメーションと出会う前から、雑誌『ペオンサ』を中心に読書を推進する活動を行っていた。その雑誌では、教師が読書指導を行いやすいように、子供に読ませたい本をリストアップしたり、いくつかの児童書について書評を書いたり、子供の読書指導に強い影響を与える両親向けにメッセージを載せたり、他の読書指導の方法を紹介したりしていた。彼らはこれらの活動を支えるために、毎週土曜日に、サンタンデル市内で数時間の会議を持ち、互いの情報交換をしていた。

サルトラのアニメーションを勉強して以後、それらから発想を得て、自分たちが教えている子供たちに行った読書指導を持ち寄って、会議で議論するようになった。議論を経て、

良い実践だけを厳選して紹介したのが、『読書へのアニメーションのABC項目集』(Equipo Peonza (1995) *ABC diario de la animación a la lectura* . Asociación Española de Amigos del libro infantil y juvenil .)という本である。この本では、作戦の名前がABCにちなんでいる。

Álbum (アルバム)

Bosque (森)

Castalia (城)

Derechos del niños (子供の権利)

Érase una vez (むかしむかしあるところに、物語の初めの言葉)

Fiesta (パーティー、祭)

Globo (地球)以下略)

のように、計26の作戦が掲載されている。

サルトラとの違いは、作戦が完全に構造化され、形式化されているわけではないという点にある。むしろ重視されているのは、語呂合わせや言葉遊び的要素であって、サルトラの作戦に触発されて、自分たちも似たような作戦を行ってみた報告である。

作戦の1つの「アルバム (Álbum)」について述べる。まず、教師がアルバムを用意する。そのアルバムとは、話の内容の要約が書いてあり、話のジャンルや話題などによって、分類しレイアウトしたものである。そこに、子供は、「写真」を貼る。写真も教師の方で作成したもので、本の中身を絵としてあらわしたものである。子供は、その写真をアルバムに張り込んでいくという活動をする事により、その本の要約や紹介を読み、本に触れるということになる。このアルバムの利用の仕方は、本を全部読んでおいてから確認として張り込んでいくのではなく、張り込む中でその本のことを知るといふ、読書のきっかけづくりである。すなわち、同じアニメーションの作戦と言っても、サルトラがやったような、「読んできて、作戦で話し合いをして、さらに深く読み込む」という一連の活動をするわけではない。

しかし、興味深いことに、このアルバムのやり方は、スペインの教育文化省が開発した読書促進プログラムの一つとなっている。影響関係を証明する文献は存在しないが、アルバムの体裁とエキボ・ペオンサとの時期的な連続性を考えると、おそらく、エキボ・ペオンサの活動が教育文化省に影響を与えたとみてよいであろう。ただし、教育文化省では、アルバムの中に本の要約や説明はない。それぞれ写真を貼るスペースに番号が書いてあり、一方の写真にみたと挿絵やイラストの方にも番号が書いてある。すなわち、子供は、この番号だけを頼りに写真を貼るといふ活動を行う。ここには、実際に何かを読むという活動がない。写真数枚セットになっており、それを学校図書館で受けとることになっている。したがって、子供たちがアルバムを完成させるために学校図書館に足を運ぶということを用意したものであろう。

このように、アニメーションは拡大していくにつれ、実際に深く読むという読書活動から、読書のきっかけづくりの方に流れていっているようである。ペオンサのメンバー自身は、その後もアニメーションについての検討を続け、自分たちの批判を兼ねて、2001年に『読書のうわさ』(Equipo Peonza (2001) *El rumor de la lectura* . Anaya) を出版している。これは、より理論的な観点から、自分たちの「読書へのアニメーション」を反省・考察したものであり、前著に比べ作戦そのものの記述よりも、読書についてどのように考えるかにページを

割いている。特に、一見理論書に見えるほど、理論についての記述が詳しくなっている。エキボ・ペオンサの場合は、雑誌『ペオンサ』の活動から、常に読書指導について議論できる立場にあり、児童図書についても勉強できる環境にあった。そして、十分な読書理論の習得を経て、アニメーションを再考することになった。

筆者としては、教師がアニメーションを理解していく際に、このような経緯をたどるのが望ましいと考えている。なぜなら、サルトラのアニメーションはあまりにも形式化されており、目の前にいる子供たちに合わせた方法を自分で作り出したいと考えるのが、教師の自然な発想であるからである。しかし、一方で、子供たちの読書を育てるためには、読書のきっかけづくりや思いつきの実践にとどまらない、継続的な基盤が必要であることに気づいていくはずである。

(2)サルトラへの批判

一般的に、教師やその他アニメーションにかかわる者が、自分たちのアニメーションを開発しようとする背景には、サルトラへの批判がある。エキボ・ペオンサのメンバーの学校を視察する中で、メンバーではない学校教師から、そのような批判を聞く機会があった。(足立注、すなわち、エキボ・ペオンサが直接そのような批判をしているわけではない。)毎日子供に接し、彼らの性質や能力を理解している教師にとっては、継続的に子供を見ていないサルトラの活動に不満を持って不思議ではない。サルトラは、「参加したい子供だけが参加する」という原則を通すことによって、どのように読書のきっかけをつくったらいいかという問題を、アニメーションの上からはずしている。教師からみると、参加させたい子供が自分から参加しないという葛藤が生じる。結果的に、拡大したアニメーションのほとんどは、「読んできて、話し合う方式」よりも、「読書のきっかけをつくる」「読書活動を促進する」という意味合いが強くなっている。

さらに、アニメーションが自由参加を強調すれば、アニメーションをカリキュラムの中に位置づけることができなくなる。すなわち、継続的な指導が困難になるという問題点がある。

また、経済的に恵まれていない学校現場においては、一人一冊の本を用意させようとする方式には、「商業主義」であるという批判もある。より現実的な読書指導の方法があるのではないかという意識を持つことになる。

(3)批判に対するサルトラの反論

このようなアニメーションの拡大状況について、サルトラ自身は次のように反論している。

「アニメーションは、読書のきっかけをつくったり、読書を促進したりすることではない。そのように考えている人たちは、本当の意味で読書ということを考えていない。本に目を通すことと、深く読むことは同じではない。読書を通して深く考えられなければ、読書をしたことにはならない。アニメーションは、そのような読書をするをを目指しており、自分たちの方法以外では、「深く読む」子供は育たない。」

筆者が受講したサルトラのセミナーでは、読書とは何かを考えるワークショップがあったり、アニメーションが子供の読書をどのようにとらえるかの講義があったりして、サルトラがその点を重視してアニメーションの作戦を構造化していることは確かである。それでも、セミナーを受講した教師や司書の多くが、読書のきっかけづくりや読書促進をアニメーション

ンととらえる理由は、サルトの批判でみたように、それらの人々とサルトの立場の違いである。しかし、エキボ・ペオンサのように、様々な違いを乗り越えて、やはり最終的には読書の本質に向かって自己批判をし、よりよい方法論を構築することが望ましいし、そのような活動を引き起こしたサルトラのアニメーションは、評価に値するもの、といえるであろう。

5 結論 「読書へのアニメーション」の特徴と読書指導方法論としての評価

以上、「読書へのアニメーション」の歴史と拡大状況を概観し、特に、一つの教師グループの活動、及びサルトラへの批判などを取り上げた。以上のことによって、この指導方法が持つ読書指導方法論としての特徴を以下のように結論づけることができる。

- (1) 「読書へのアニメーション」は、図書館員のストーリーテリングを原点としている。したがって、不特定の子供たちを集めて、読書に関する活動を行い、子供に読書への関心を呼び覚ますことが、その特徴である。国語の授業用に、子供たちが読めるようになることを意図した方法ではない。俳優のパフォーマンスとしての要素が強いことを考えると、日本の教師が教室で行うのに不向きという側面もある。あるいは、教師がそれを行うためには、十分なパフォーマンス能力の開発が必要であるといえる。
- (2) したがって、アニメーションは、カリキュラムに位置づけられないという決定的な弱点を持っていると批判されている。
- (3) しかし、お話を語って聞かせるということしか、読書指導の手法が無かったところに、この「読書へのアニメーション」の手法が開発されたことを考えると、読書指導の具体的な手法として、大きな提案性があったと評価できる。特に、読書指導をしたいが方法が分からなかった司書・教師・その他の文化活動を推進している人たちに、活動のヒントをもたらした。この点から、サルトラの「読書へのアニメーション」という指導方法は、スペインの読書教育に大きな影響を与えたと言える。
- (4) 一方、サルトが目指した「深く読む」ということは、これらの活動を行っている人たちに十分に理解されているわけではない。なぜなら、サルトラは、関心のない子供にどのように関心を育てるかという読書の入り口については、扱わなかった。また、足立(2002)で指摘したことであるが、サルトラのつくった理論書がなく、重要な概念はセミナーで説明されるという事情がある。その結果、その読書の入り口をこそ解決したいと願う人々には、読書へのアニメーションはきっかけづくりとして位置づいていった。
- (5) (4)のような状況について、学校外で行われていた読書指導法を学校・授業内に持ち込もうとするときに、この指導方法で何が行えて何が行えなくなるかを解明していくことが必要である。サルトラは、自分たちの方法で本当に深く読む子供が育つし、その深く読む経験から、子供が読書の面白さを発見すると考えていた。しかし、現場の教師や、読書教育にかかわる多くの人たちは、これらの手法の前に、まず、読書に面白さを発見するきっかけを与えたいと考えた。すなわち、サルトラの「読書へのアニメーション」では、そのきっかけをつくることができないという評価がなされていたといえる。日本の国語教育において、エキボ・ペオンサのような自己批判を含めての活動が位置づくためには、何度もアニメーションを行い、教師自身が読書について考え抜くということが必要である。

付 記

本稿は、平成14年度日本学術振興会特定国派遣研究（スペイン国派遣）スペインの読書運動『読書へのアニメーション』成立背景としての言語観の研究」の一部として行ったインタビュー及び収集した資料に基づいている。

ご多忙にもかかわらず早くインタビューに答えてくださった方々、ならびに資料収集にご協力くださったマリア・ホセ・アルバラ氏（科学研究高等会議スペイン語研究所）に厚く感謝申し上げます。

文 献

- Bryant, Sara, C. (1905) *How to tell stories to children.* Houghton
- Bryant, Sara, C. (1924) *El arte de contar cuentos* (Spanish translation)
- Sarto, María Montserrat (1984) *La animación a la lectura ; Para hacer al niño lector.* Ediciones SM.
- Moreno, V. (1985) *El deseo de leer ; Propuestas creativas para despertar y mantener el gusto por la lectura.* Pamiela Argitaletxea
- Cendán Pazos, F. (1986) *Medio siglo de libros infantiles y juveniles en España (1935 - 1985).* Ediciones Pirámide S.A.
- Junta de Andalucía (1989) *Bibliotecas escolares y animación a la lectura.* S.P.Literatura infantil y juvenil. Centro de Profesionales de Jerez
- Domech, C., Martín Rogero, N.y Delgado Almansa M.C. (1994) *Animación a la lectura ; Cuántos cuentos cuentas tú? Popular*
- Equipo Peonza (1995) *ABCario de la animación a la lectura.* Asociación Española de Amigos del libro infantil y juvenil.
- Otero García, M.J. (1996) *Jugamos a animar a leer.* CCS
- Aller, C.y Romero, A. (1996) *Motivaciones, estrategias, y juegos que animan a utilizar el diccionario.* Quercus, S.L.
- Cerrillo, P.C.y García Padrino, J. (1997) *Hábitos lectores y animación a la lectura .* Ediciones de la Universidad de Castilla - La Mancha
- Carlos Aller (1997) *Animación a la lectura-II- ; Juegos y actividades para después de leer.* Quercus, S.L.
- Montserrat Sarto (1998) *Animación a la lectura, con nuevas estrategias.* Ediciones SM
- Calvo, E.G.etc. (2001) *La Educación Lectora.* Fundación Germán Sanchez Ruipérez.
- Equipo Peonza (2001) *El rumor de la lectura.* Anaya
- Remonsa J.Á. (2001) *Animación a la lectura teatral.* Ñaque Editora.
- García Padrino, J. (2001) *Así pasaron muchos años... (En torno a la literatura Infantil Española)* Ediciones de la Universidad de Castilla-La Mancha
- サルト ,モンセラット・佐藤美智代・青柳啓子訳 (1997) 読書で遊ぼうアニメーション 本が大好きになる25のゲーム 柏書房
- サルト ,マリア・モンセラット・宇野和美訳 (2001) 読書へのアニメーション 75の作戦 柏書房
- 足立幸子 (2002) 『読書へのアニメーション』の成立 国語科教育 52 pp.64 - 71 .

Summary

Sachiko ADACHI : The origin and expansion of La Animación a la Lectura in Spain

La Animación a la Lectura is a teaching method on reading in Spain. It was developed by a journalist, Montserrat Sarto, in the early 1980 's. Since it is introduced into Japan in 1997, the practice of this method is increased in classrooms. It is important that to clarify the history of this method in Spain, in order to find the problems and solutions. In this article it is described by several interviews of researchers, teachers, journalists, actresses, librarians, publishers, and book sellers.

The origin was storytelling by a librarian in the early of 20th century. After libraries for general people were established in Spain, some librarians used storytelling for children in order to promote children's reading. Many actors/actresses do storytelling as a kind of performance in Spain. Sarto and her colleague, however, started La Animación a la Lectura under situation of storytelling ; because, she said, "many children need more activities to approach books" . Therefore they developed many teaching strategies as a method in the 1980 's. Then Sarto taught and spread this method in her seminar seminars to teachers, librarians, parents, and people who are interested in children's reading in the 1990 's. They expanded this method in their situation.

In conclusion, La Animación a la Lectura has two problems to apply to the reading instruction in classrooms. First of the problems is performance skills of teachers who organize this method. Second, there is no placement within school curricula. If teachers try to use La Animación a la Lectura in their classrooms, they must think how to increase their performance skills and how to place into the curriculum, in order to solve these problems.

(Japanese, Faculty of Education)